徳國奇法 東海記篇 三

和書門
類 二九四二三
號
函 一二二
架 一一
冊 一〇

内閣文庫
和書
類
號 二九四二三
冊 一〇
函 一七二
架 四

内閣文庫
番號 和 29423
冊數 20 (8)
函號 172 87

国立公文書館
National Archives of Japan

花逕家文庫

東遊記後編卷之三

南新子著

内一一〇九一號
堀氏文庫

四五六谷

四五六谷ハ越中飛彈信濃三國の百入り込る谷なり富山藩
ろ神通川と逢ふ又流れくのわるゝ水も深きゝして
奥ゝと見る者なしゝ年花州舟津の人四谷の奥家宅
んとゝく三日の糧を用ゐして陸川ゝを入りしゝ水を食
ゝしゝけるあまをば魚を釣り食ゝて拾数日の後入戸
ゝ水ゝ住ひしゝ者の魚を釣り居る様と見やゝる水の形の化
けゝ大ゝ驚きゝて走り行ゝて魚を釣り居る者も驚き
あゝ山を出ゝ見るゝ水たる者の新奇実に心ゝ

さいそんうこなつ〜きぐひかくみゆるうこハ世ハ書こそおろう
ゑんとていそぎ近ゆきつり遥近あくたゆかれ新城見るに行ろ
書きあく書くのごとくあれば世裏こ我こ山神の信西ろ〜あ人の人
ろ事くと忘婚ひとかるる妻成あ〜ハきりんとをきてこ後ハ
奥源く入る者ろ〜とこ山事ハ城こ法ろ合ひ〜ハ花禅のこ山
の人こ座ハ在りていつ拓これハ山神の妻ゆきあ〜ば山と合とろ
日ハ夫ハ人ハ人の新ハ夫形ハ見ゆるこ花洲の中ハ人の住来
こるこ合ハ人の新ハ〜あるこ西ハこ合城ハ〜ハるきハ新
しくはこのごと〜山道こ西ろ別ざる人ハ大ハ巻くまけれども西ろ
人ハ書くハこ書くあやし〜も事なしとこ西ろかのほこそハい

ゆくゆのつをこ〜ハ新ろ

毋義西房

越前西敷ハ大ハ皇汁常宮素盞のろよ縄
間村といつろ海色あく角ハ法漁家ろ山村の家屋こ毋義
西房といハ世家ハ毋義別当真盛ハ生ろ〜あ年ろ〜我こ
時ろ人ハ代こ家ハ續して毋義ろ〜房と名素家栖ろれば西の
家屋こ勤くこ色ハ遺物ハ今ハあく西持ろ〜こ云海ハ通鄙の
百姓ハ浮沉盛衰ろく粉百年の家と保てる老ろ〜命も書
文ハ素盞ろ〜時彼家沈ろ〜ハ孫こ真盛ハ舊ろ〜ハ
さひ〜ろ〜ろ常宮の風ろ後よのろくこ事とくのこ

るてうあるうるゑ玉ゆゑに名付たまるゝ人たふまるゝ堤まる居
るを本云ものゝ

北極星

小極星赤地のうるはしくして地球の動出なる事し地上あて
真ゝ出ふ事拾五里程と漏ふる時ゝ天ゝ壹度と遠ゝ波ふ
小極星の度数と智ゝ居かゝ玉の寒暖と又玉の寒暖と
知る醫五ゝ玉ゝの氣候とゝゝぶれば玉ゝ陰陽の変化と
ゝゝ玉ゝ故ふ疾病ゝ多ゝ事あゝ玉ゝ人天学ふ精ゝ
人萬國の度数とゝゝ玉又日本ゝ玉ゝ法の度数詳ふ
ゝゝ玉ゝ命と陽地の法いて狂ゝ小極の度

数と測ゝ玉ゝ法目の考の二助とゝ玉ゝ測量の
の器と新ふ工夫し造り出して推ゝ仍玉ゝ測リ方ふ先新中
富山ゝ玉ゝ尺ゝ新小極星地を出ゝ事三十六度半強ゝ出羽ゝ秋田
四十度半ゝ奥州津軽渡ゝ関四十度四分ゝ同ゝ奈四十ゝ度
七分ゝ同三馬屋四十ゝ度ゝ分ゝ南部盛岡の四里ふ澤民と云
所あ里ゝ所四拾度七分ゝ津ふ玉ゝ屋ハ日本極ふの地ゝ玉ゝ
宇精密ふ測ゝ玉ゝ今屋と云遠所四拾弐度弐分ゝ狂南部地の伝
廿ヲコペのゝ屋ハゝ異大ゝ小ふ半ゝ小ハ四拾三度ふ玉ゝ
ゝ地ふ玉ゝ玉ゝ玉ゝ玉ゝバ法ゝゝ後ふ法狂地ハ玉ゝ事ゝ玉ゝ安海渡
皆韃地の砂漠ふ狂ゝ玉ゝ玉ゝ玉ゝ玉ゝ玉ゝ玉ゝ玉ゝ玉ゝ四拾度極の花ゝ

是は北狄沙漠にて四十二三度の所なるべし。又日本にて極寒の地は大隅国佐田岬也。是三十度弱の所也。是を以てみれば日本も南は十二三度にて寒暑すくなしといへども京都は皆人のしる如く三十五度強也。江戸は三十六度強也。唐土にても洛陽長安抔三十五度の所といふ。齊魯二三十六七度の所といふ。誠に唐土にても日本にても中和の所也。三十五六度の国は四時の気候正しくして人物も聖賢多く出て草木もよく暢茂す。直なる也。凡其気温暖にして物を生ずる事多し。寒国にても其所によりて山岳高からざれば穏かなり。此故に北極出地の多き所は気寒冷にして物凝結して水凍り山岳も峨々として聳えて高し。陰陽蒸気の煙梅雨の極

奇妙なる事のみなり

登龍

越中越後の海中夏の日龍のぼる事いと多し。其龍登る事を一村雲空より下り来て海中の潮水に雲に入り逆巻の浪の中に入るを見て又あやしき気を見れど竜の形見ゆる事なし。尾頭など見えず。時に見ゆる事は登潮と逆巻て空に登る事しく又其際に云所の水沫といへるもの十余里の所まで覚えて其龍登るを見るといふ。又鉄脚道人退宜の時代越後の名立の沖にて船中にて通りし時海底より大龍の蟠るを見しといふ。嶮岸といへる事は此時代に海底より

るゝ事とるゝ見るハ皆怪なる物ゝうさ奇怪の事ゝこゝ事
俳園子の劉記とゝ云ふ事ハ海を中ハ或人江戸より船にて
しハ来あるの沖津の沖を過る時ハ一ツの黒き塵そゝり
拙亦とゝして海を見る亦ハ雲の如き見る龍の巳を書ゝん
ハゝとハ海より雲ハ焼べゝとして紅中に人ゝのごゝ
頭髪長切面大ハ鳥ゝ息氣ハ口ゝ吹ゝ波を
ゝ中ゝ海出の事ゝ見ゝ龍の登るハ必雷の雲す
海に待ゝ龍の伏ゝる所ハ雲あるゝ日本ゝ
龍ゝ雷の和意ゝ云ゝ阿蘭陀の工キテ

イルと船ゝてゝ中ゝ出ゝ紅毛人ゝ船ハ水に入ゝ色
ゝ車に成ゝ中ゝ来院のゝ水に入ゝ色
登る勢ひ水ゝ和意ゝ和意ゝ物ゝ登ゝ中ゝ氣の
ゝ中ゝ小黒の中ゝ人ゝ登ゝ中ゝ天地の
ハ云ハ人ゝ登龍のゝ事ゝ
黄鐘調
撞鐘ゝ黄鐘の調ゝ
大阪の天王寺の六時堂の鐘ハ黄鐘調ゝ
金ゝ天王寺ゝ撞鐘の時ゝ

ゐて幸あるとして播州の加西山法林寺ゆく律寺に至
と和とふ法成ゆゑ世を善しく善紅花のせうを見て聖
徳太子の附り法師ゆゑ此今度又越前敦賀の常宗語ぐ
しよひ猿尋常の拙形にしていかをくおのをとて見て
見れば形の儀よ完ゆゑして今猩の形古雅ゆゑ珍とみま
バ朝鮮の文と豊臣公の代大谷形部山地小五寧として生ち
一時彩鏡ゆゑ奪ひ来り一猿ゆゑ小鼓ゆゑ云伝ふ
其銘文に曰

大和七年三月日菁州蓮池寺鐘成内節傳
合入金七百七十三迄古金四百九十八迄

加入金百十迄
成典和上　忠門法師　綴糸甜法師
上座　則忠法師　都乃法昧法師
郷村主　三長手　朱蕉吹糸
作報舎　堂清軍師　龍碎軍師
史六　三忠舎知　行道舎知
成傳古　安海哀大舎　哀大舎
節州抗　皇龍寺　覚明和上
かくのごとく朝鮮文字ゆゑ法師一音とゆゑ成ゆゑ撞
事禁制ゆゑ札紙掛ち入おるハ寺僧ちく撞ゆゑときけハ

入あひハ必定べしとぞいひしに言葉石の香まさるゝが嶽に登
りてくらく夜よりへるく此等に掛りかけしかバ入相ないく之鐘の
音とききつらず其音の出るをすしらるゝはるゝくにかに此鐘を
定め穿て其の梵鐘の調に音ん音あるまるべし鐘を鋳て後に
ころ穴を穿てハ穴の大小によりて調子を施すべし梵鐘に
合せるにもなく穴て廣めも梵鐘の音をはらく穴てゆかしむ全
く鐘を梵鐘に撞んと欲せバ粒十遍撞るよしこたる年に
至るまで八雑るべし彼西園寺の鐘の錢度を撞るれしも
初より全く撞んと思ひし所あるべし左より穴を穿たれたる度
あてよく調ふべし何もは古き鐘すして穴あるハ皆な梵鐘の

調子とするべし尾上刀田山の鐘は常楽の鐘なれば古人も思ひ
し鐘と見えて古きを世に傳る律の事不安にてまうまう
了ぞ知るものもよくもくて又鐘ハ梵鐘に撞くいふるにたる知るべし
しておのづから撞るを聞にもし尾に鐘に穴あるハ奇妙くのもと也
それの為にとていふる銭志ろく入もよくなり来もろ小ぞ
おそらくハ日本国中に梵鐘の調に叶へるも此本尾上
鐘ハいまだしらず又穴ある鐘ハおの聞で見るまで余も尾上
の鐘を見しにハ穴ある事く妙しくおもひしが常楽の鐘と見
刀田山の鐘は常に神の為に調子の為にせし事を悟りき今
より後鐘を鋳る人ハ穴を穿たハ梵鐘の調子にならしめんを

いとむかしよりさだかならざるべし又或人の摂州東長柄村露満寺の鐘古き
鐘の銘をうつし見しに是も損ぜしかどもいまだそれとは聞ゆる
や又一とせある神道者の神前の鐘ハ双調なりとて流行
せしが是こそ調子に叶へる鐘なりしが余の鐘を撞きし人ハ新に鐘を
鋳る事数十度に及びしかども其の鐘双調の音律に叶ふことハ稀なりし
となむ一つも双調に合はざりき鐘の声の減りしとて双調に合はせ
むと是また文化鐘に穴を穿てるも猶ほ渋りて金を損へし
しとなりこはいとめでたき事なれども其鐘を作る
古鐘にあるは事たる南都の鐘を見るに東北
朝の北燕の製にして律の黄鐘なるよと感心しまたき

以黄鐘調の鐘は損ぜしめて数十度にかなひてこそ是と云ふ
鐘の説ハなしともあらぶる事は知らるるなりて其ハ別に音
律の書にあるべしたけれバ此記にハ略せり

帚木

坂上是則の和歌に帚木の事は東や信濃の国にある帚木の事
ありてこれゆゑあり古来帚木の事は帚木といふて古来行末遠国
にありと見えたれども是をいふ源氏物
語帚木の巻の中に一説の説あるも此帚木の説なり
これ真に帚木奇怪なるにもこれあるとかやいふ
この事信州の國びしけるのものの東路に

沼尻曽街道の澤小妻ゝとこゝあり其妻の澤より東
街道と離れ間道小入る是ゝ仮田の城下へ出る道あり
其百十里沼山並谷計りて樵者の行きゝ細々蘭麝
抓ゝ生所ゝ多く幕谷といふあり此幕谷といふ
ゝ幕谷ゝ云ふ所ゝ多ゝ大なる時のまおりゝ
けるゝ王平勝頂平抓ゝ花あり初此幕
谷の左右の方ゝ流く大なる谷ゝて底ゝ谷川の音
雷の如谷底ゝ向ゝ雑樹陰ゝ生ひ茂りたる
山あり其山ゝ七八分目ゝ大なる松ゝ生ひ茂ゝ其木の
本ゝ倒ゝ生ひ茂ゝ

九ゝ小蔵ゝたる赤ゝ生ひ茂ゝ菜園ゝある幕の赤の赤
るゝ此ゝ其モミの木ゝ幕の赤ゝ
樹ゝ小ゝ茂ゝ中ゝ雑樹茂ゝ中ゝ
其モミのゝ赤ゝ赤ゝ白ゝ即ひうゝ名ゝ
沼ゝ見ゝ時ゝ新ゝ寺ゝ其モミの木ゝ
るゝ小ゝ在りゝ其ゝ幕ゝ
ゝ通ゝ抓ゝ
抓ゝ抓ゝ実ゝ氏
ゝ抓ゝ幕ゝ
ゝ抓ゝ
ゝ抓ゝ
ゝ抓ゝ

のうへし給ひて是より奥州の金売吉次が通りし時より
あやまりてといひしなりとぞ按ずるに是ハ燈明の浦といふ名
こそたてまつれハむかしよりの名なりとて今まてハおくの郡の中
の名高きものハ見る人もなき所なり今ハ宿の辺奥兄
への本街道まて彼諸寺前抓ひたる東の宿へ人家もたへなく
それはなはだ多くふるしき辺に浪合抓ひ多くの宿王子勝
負事も古戦場にして又是より東ハ風雅の所ずいぶん多く
とありすぐれたる見ゆれバ今のごとく人家迄ハ甚だ稀にて
ハあらずましと覚ゆ又其本のまた所の跡ハ伏屋といふ村
とありとく古歌の詞を今ハ里の名にもちひてたてける

何も手に斎めの神木なりとて多くきと友人懐紙にも見
物しとて語り合ひぬ

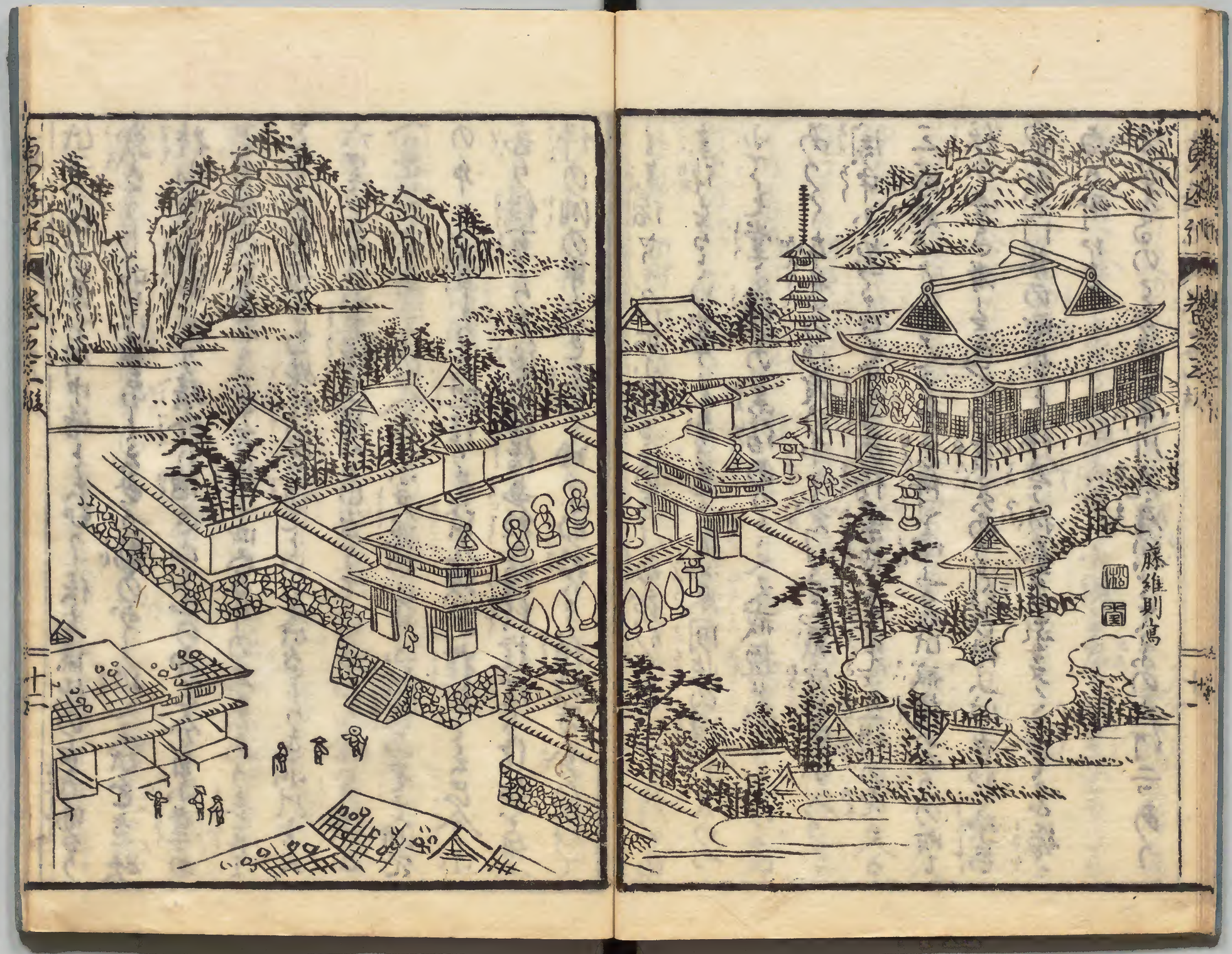
善光寺

信州善光寺ハ格別の霊場にて世の名高き仏をする寺にて諸国
よりの参詣の人絶る事なし堂塔も広大美麗にして田舎寺にハ珍敷
寺也本堂南向より北向まで奥行三十六間横幅十九間程
彼ふきを用ひて棟作りにし甚結構なる事ハ信州全体大堂
也御影などにハ漆塗にて一丈余の町家百姓家迄も
瓦葺ならずしてその所にて切石門より中堂まで弐百間の形の大石
なく日本事く善光寺にまいりて本堂に通る夜ともに八我

執者を、人の死骸しかを再び迎てすてゝ毎夜弱象き道
教人こゝ今も多くゝ通夜ちゝ小俗の廣き堂小多くゝ
るゝ所まで乃ち教小ゝ燒的のえうも通ゝ人新ゝとゞゝ小
八人ゝ次念佛の多い遍小ゝ生えゝいゝは後ゝ初の程八人全の
くゝまゝ小ゝ小ゝ小が初夜ゝゝ時ゝ小ゝ多ゝ夜ゝ多ゝ
小ゝ小ゝ小ゝ小ゝ小ゝ小ゝ数十百人小ゝ乃ゝ兄弟ゝ者の来る
ゝ小ゝ扨丑刻ゝ小ゝ毎夜ゝ者の用性あゝ寺僧達の紙
ゝ小ゝ毎ゝ引ゝ戸ゝ性ゝ問ゝ皆ゝゝゝ性ゝ夜八更ぬ
ゝ性ゝ人の新八ゝのゝゝ人ゝ人ゝ堂八廣ゝ小遍家ゝゝ
ゝ新ゝ性ゝ時伝仏の人ゝ人ゝ流ゝゝ今ゝ法方の仏流小

ゝ新ゝ性ゝ…ゝ時小ゝ毎夜ゝ小ゝ多ゝ
新ゝゝゝ小ゝ事ゝ人ゝ小ゝ小ゝ小ゝ用性の時刻ゝ
小ゝゝ堂ゝ満ゝ新ゝ小ゝ又戒檀ゝゝ
ゝゝゝ本ゝ小ゝ廣ゝ小ゝ小ゝ小ゝ小ゝ中小ゝ
廣中小ゝゝゝ人ゝ小ゝ小ゝ小ゝ中ゝ
三遍廻ゝゝ小ゝ人ゝ名佛ゝ唱ゝ小ゝ戒檀ゝゝ時
伝仏ゝ者ゝ色ゝの変ゝ多ゝ小ゝ寺ゝ小ゝ昌
ゝ小門前の断ゝ後ゝ抜ゝ大ゝ東ゝ
ゝ町ゝ

ゝゝゝゝ屋川流ゝゝゝ大河二ゝ



国立公文書館
National Archives of Japan

此二ツの川の間を川中島と云むかし信玄謙信の古戦場なり
戦のありし所ハ八幡原と云西の方の筋のかたに根之丈此をもて妖
捨山あり更科あり姨捨ハ俗に冠着山と云山の西ニ分目に堂あり
其堂の傍に至る路に有横十四丈有斗の大岩あり本尊ハ
見わたし見渡る是姨捨の古跡ことはつ又此あたり東に北方に
六里の東に戸隠山神社ある此あたりそのまゝに戸隠山
ハ社のあるをそこにあるちの人ハ中の本戸隠の山中に洞穴あり洞穴
の中ハ昔より地神の是従九頭龍権現と云是今に
至り往古より戸隠の社僧毎朝九頭龍権現へ供物を供ふ
件の洞の中へ入る者なし毎年明朝にハ膳部皆食ひ終りて

あらし此埴科の里の信濃にありて此所の言葉に慰しく詠し
と云説ハ斎宮の事なり

諏訪湖

信州諏訪の湖ハ周廻三里の小湖なり鋳物乳山ますあて
の中にあり景色ハ無双の地なり此湖をへだてゝ西に富士
山の北西と見る富士山峭立ときこえて宝永の頃富士の
形をこれ湖とも見らるゝも又奇なり中に云相此湖に落よりふた
不思議ハ氷のあつきを中にとほりて文奇妙のうそとする此湖水
冬に至ると六宮の前の堅ひまて一面の氷となる厚さ数尺に
及ひ全体の如くにして平地に異ならす正月より翌年

の二月まで人馬皆氷の上を往来してかりしもとかく来る
下の温泉よりの飯坂迄五里の所なるこの氷のことく二月迄
ゆとる者絶一里ほかあるこの便利なるこの氷の上を通行なる
故て車にてもむりこの氷抜きて水底ほかの所へ入りしなりと
ハ不思議なるかの向ひしほかの神の神ほうとの事あるこの神ほ
とあるこハほハ氷抜をしこの方ハ氷抜をしこの事ほかあるこの又神ほうの氷い
まこの事ほとのこの事ほとのこの事ほとのこの事ほとのこの事ほとのこの事ほ
なるこのことやいほそのりしめ一夜湖とかこの音してあるこのある
ごこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほ
引毎ほうなるこの氷抜をしこの氷抜をしこの氷抜をしこの氷抜をしこの氷抜をしこ

神ほうの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほ人馬往来この過ちこの二月の末又
ほうるこのこの所ほハほうこのこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほ
属とこのこの所ほハ氷抜をしこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほ
の狐の所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほ又飯坂ほ温泉あるこの所ほ
ほの中ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほ温泉あるこの事ハ知ることハ氷抜をしこの所ほ
温泉の湯いつるほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほ氷ほ抜くこの所ほ湯気の
ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほ又下の飯坂の拝殿の板壁ハ抜くこの所ほ上の飯坂の塔
ハ新しこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほ里波漏てこの所ほうこの所ほ人る又この飯坂明神のみ
ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほハ四季とこの所ほ毎日おこの所ほうこの所ほ雨降この所ほすこの所ほ
ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほうこの所ほ又ハ神の廻廊の板敷所と用ひこの所ほ人歩行この所ほうこの所ほ

云ふしかるに不思議なくあり東海道にある天龍川ハ高原氏
其所より流れ出る水なれバ其所深く魚鼈も多くして
此辺利益ある水なり

鶴岡慈悲

天明卯年の凶作に奥州津軽南部最餓饉して足腰のたゝる
者ハ四方に走りて食物を求む羽州秋田隣国なれバ餓人
の来る事数万人秋田の地も亦凶年の事なれバ救ひ足る事あ
たはず是故餓人隠もなく又鶴岡に来る路に餓人中に押あひ
少く食を得たる者ハたちまち其地にて餓死するに依て鶴岡
の人も各身上の限り力を尽して救ひし事人々の中に甚さてあ

りける中にも鈴木今右衛門といふ者ハ本ハ鶴岡の中にても富
しき者なりしが家の衰へ来りしかバ今ハ役家となりて自ら
耕作して渡世しけるが此人元来慈悲心深く此度も身代の限り
出し餓人を救ひけるに従僕ども餓死とするに志のひとを取る
の田畑山林諸道具をことごとく売払ひて其力の限り救ひ
尚不足なる故又今度ハ妻まで自分の衣服の残りなく売
払ひて救ひけるに暁に衣服悉く売のこりもおのが上つ着ハ
ほとんと尽しが或日亦其身の衣服を売りて救ひけるに今右衛門
見て妻に女ハ猶更衣服なくてハ愛するものゝゆゑに足とも
売りて餓人を救ひけんとぞ今ハ鶴岡の事なる程の男

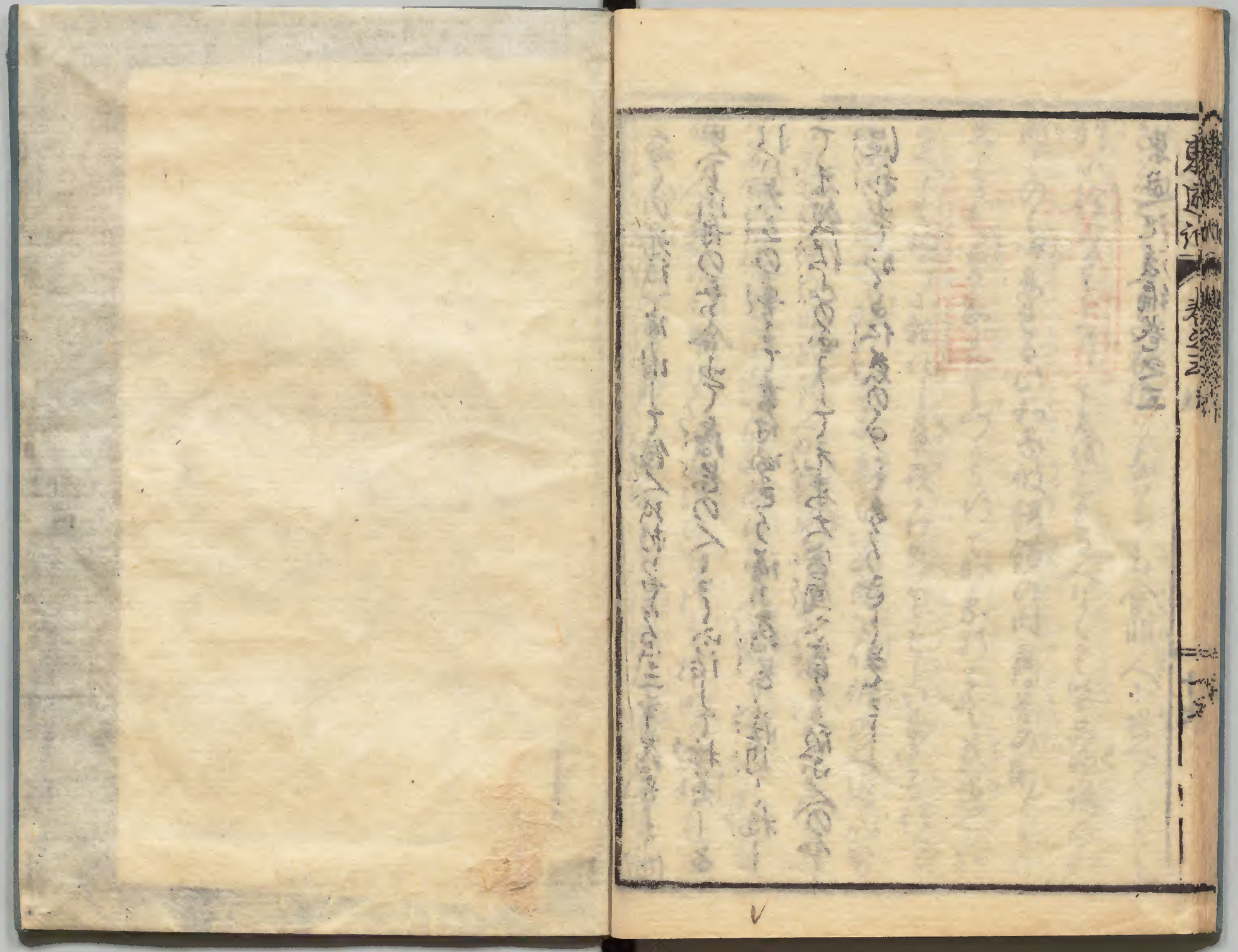
と語りし又如へ出る時は若殿の子にはいとくけいぶち年こしらいひ
しかば書こたばこ出さんとて書べくなりく若殿あもてを
こなれ如へ出るかとあき如へ出るふくろて掛も明んざ子入用く
今若殿と言うて如へあるを掛と言用こかんざし
言用けり言葉の掛ようはかとあらばくはいとうとる言葉ひ
おば又作程のくとも掛べーとはかはいとこ
姫ナ如ナ小あるとうこ同し年ひの小姫餓はれ食をもひて
門おろ小ち体海小あるまて作家の用ひ
ゆくうるくこ海うくさ小姫いやうく如の如くくきん成り
小ちくひ振ひくくたるあと掛母親見ちくく我殿と呼ひ

こ言方孫入ゆくと言ふくあくふ言ちがあのあ海ふ石便
ちるを掛く年の程と同し位ひ衣掛と祖ちるべーこよ隠く
暗氣ゆるあるなしあ同こ言ひずはこ言入こねこてあの
小姫ふとくせちくひのくは姫ひのあふくきんくて上ちこさ
ふちこさ方の絵入と言くこ言ひ父母ちる小海と流くく怪べ
又寒景乃町いづき小海流といは所あるけ海流小乃ひんあ
ア禅宗ちるが道徒と学問とあくて是ちて年ち大地乃
住職とも方くこちるくち小ふ苦辞退、そ海流小小さ草
庵ふ法ひ毎日さくくしてこ自とこ一ち乃は本流ちる
分は言ひとちび振付は伝者ちる野小俗ちくく与ちるに乞

ときとし。かゝる衣服ハすなハち乞食非人に與へてきるも
別に作りかへしとぞ。是銭ある人ハかくのごとく皆只此塚の和
尚とのことく手来るは和尚彼饑饉の時露居の所に
在りても家ある者ハゆづりて、かの家なき者に慈悲を加
へ、わけて頼りに勸化し、其所を借りて食をふるまひける。譬へて
毎日餓人をあつめて、事ゝ此和尚を信仰の人追々加勢
して世話をなし、終に餓人に與へ施せしものハ凡そ米
凡米百八十俵、金六十両とぞ。和尚の力にて施しあへけれ。和尚常
くハ人に物乞ふ事なく、貪很の心なくして眞の行をせ
次法議塾固の佛たるハ諸人ともに信仰帰依して皆々

あまたの米銭を寄附して餓人を救ひたるは二年露宿より酒
田へ川舟の寄合にて露宿の人を一所に治して稱美し寺
ながた立の寺まで書付あたへ、諸方に露宿は荘内にも称し
て米穀沢山の中にして元来大富國之富たる故に人の心も
温和にてかゝる仁慈の人も多かりきと覚えたり

東遊記後編巻之三



国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan